

令和 2 年度 第 2 回 静岡県文化政策審議会 会議録

日 時	令和 3 年 3 月 19 日（金）13 時 30 分から 15 時 30 分まで		
場 所	静岡県庁別館 9 階特別第一会議室		
出席者 職・氏名	<p>会 長 横山 俊夫 （静岡県文化芸術大学学長）</p> <p>副会長 太下 義之 （同志社大学経済学部経済学科教授）※Web 出席</p> <p>委 員 北川フラム （アートディレクター）※Web 出席</p> <p>木下 直之 （静岡県立美術館館長）</p> <p>澤田 澄子 （公益社団法人企業メセナ協議会常務理事兼事務局長）</p> <p>柴田 英杞 （独立行政法人日本芸術文化振興会プログラムディレクター）</p> <p>鈴木壽美子 （静岡県文化協会会長）</p> <p>高山 靖子 （三菱商事株式会社社外監査役）※Web 出席</p> <p>遠山 敦子 （静岡県富士山世界遺産センター館長）</p> <p>松井 冬子 （日本画家）※Web 出席</p> <p>宮城 聰 （公益財団法人静岡県舞台芸術センター芸術総監督）</p> <p>森谷 明子 （日本画家）</p> <p>諸田 玲子 （作家）</p> <p>静岡県 スポーツ・文化観光部長 植田 基靖</p> <p>スポーツ・文化観光部部長代理 京極 仁志</p> <p>スポーツ・文化観光部理事（文化担当） 渋谷 浩史</p> <p>〃 （文化プログラム担当） 落合 徹</p> <p>〃 文化局長 紅野 聖二</p> <p>（事務局） 〃 文化政策課長 室伏 学</p>		
議 題	下記のとおり		
配付資料	別添資料のとおり		

1 議 題

- ・ 第 5 期ふじのくに文化振興基本計画の策定に向けた論点に関する審議

2 審議内容

別紙のとおり

(別紙)

1 結果概要

議題について、資料に基づき事務局から報告、委員から多様な意見が出された。

2 部長挨拶

新型コロナウイルス感染症の拡大で、文化芸術についても困難な状況が続く中、アーティストから様々な工夫により発信していただき、県民も文化芸術の素晴らしさを改めて感じていると思う。今、第5期ふじのくに文化振興基本計画の策定を進めるにあたり、ウィズコロナの中での文化振興についても大きなテーマとなるので、忌憚の無いご意見をいただきたい。

3 議事

○横山会長 初めに本日の審議の論点について、事務局からご説明願いたい。

○事務局 今回の審議会では、第5期ふじのくに文化振興基本計画の策定にあたって、二つの論点についてご議論をいただきたい。今回の審議会を経て、具体的な策定作業を進め、次回7月の審議会に計画の骨子案をお示しし、ご審議いただきたいと考えている。

それでは、初めに現在の第4期計画の進捗状況につきまして、お手元の別添資料2によりご説明させていただく。

別添資料2は、前回11月の審議会で本県の文化政策の歩みとしてお示しした年表に、第4期計画の進捗状況を追記したものである。今期の大きな成果については、一つ目に東京オリンピック・パラリンピックに向けた静岡県文化プログラムの推進とアーツカウンシルの設立。あとは世界的な評価を受けるSPAC、静岡県舞台芸術センターを中心とした本県発の文化の創造と発信。それと子どもたちが文化と出会う機会の創出。あとは文化財の保存・活用に向けた体制の拡充である。

文化プログラムについては、県下で1,500件を超える取組を展開しており、その実績を生かして、本年1月に県文化財団内にアーツカウンシルしずおかを設置した。初代アーツカウンシル長には静岡県文化プログラムチーフオペレーティングディレクターの加藤種男氏が就任し、住民主体の創造的な活動を促進するプラットフォームとして、社会の様々な分野の担い手による地域の活性化や、社会課題への対応を目指した創造的な取組を支援している。

SPACを中心とした演劇の都づくりについては、令和2年度は今後の事業展開の指針と

なる「演劇の都」構想を検討し、来週開催される委員会の審議を経て、策定される見込みである。併せて人材育成事業の一環として、プロの演劇人材を目指す高校生を対象として、SPACの資源やネットワークを生かした演劇アカデミーをこの4月から開講することとしており、現在受講生の選定を進めている。

文化財の保存と活用については、令和2年3月に静岡県文化財保存活用大綱を策定し、文化財の確実な保存・継承に向けて、観光や地域振興への活用を基本方針に掲げ、市町の保存・活用地域計画の作成支援や、文化財を支える人材の育成を重要な柱として取り組みを進めている。

将来を担う子どもや若者に対しては、ふじのくに子ども芸術大学や、令和元年度に立ち上げた子どもが文化と出会う機会創出事業の他、県有文化施設における事業等を通じて、多様な文化に出会い、体験する機会の提供を拡充している。また、障害者芸術活動の所管が文化局に移管されたことにより、文化政策と障害者の芸術活動の振興を次期計画に盛り込み、総合的に推進していきたいと考えている。

なお、第4期における主要事業の詳細、計画における活動指標の一覧、令和3年度文化関連事業の予算について、別添の資料編にまとめたのでご参照いただきたい。

続いて、第4期計画の実績や、本県の課題を踏まえた第5期計画に盛り込む事項を整理したものが別添資料3と別添資料4の体系図である。こちらは、前回の審議会で皆様にお示しし、委員の皆様から概ねご了承いただいていたものである。また、前回の審議会の委員のご意見については、別添資料1にまとめた。

次に、議題についてである。第4期計画の基本計画に掲げる文化活動を行う環境や仕組みの整備に一定の道筋が立ったことから、令和4年度を始期とする第5期計画においては、文化振興の新たなステージを目指すことにしたいと考えている。そこで本日は、二つの論点を設定した。論点1として、第5期計画の基本目標において、踏まえるべき文化の意義と果たす役割。論点2として、第5期計画で掲げる重点施策の方向性と具体的な内容についてである。論点1については、社会情勢の変化に伴い見えてきた文化振興の新たな意義や方向性、文化が地域社会において果たす役割など、第5期計画の基本目標に掲げるべき理念や目的を定めるための審議をお願いする。論点2については、課題認識や方向性、施策の具体的な内容への提言など、重点施策に記載すべき内容についてご審議をお願いする。

以上、本日ご審議いただく論点について説明した。新型コロナウイルス感染症等により、文化芸術を取り巻く状況が変化する中で、文化の意義や果たすべき役割を今一度ご議論いただきたい。

○横山会長 事務局の説明を踏まえ、論点1「第5期計画の基本目標において踏まえるべき文化の意義と果たす役割」、基本的に何を目指そうとしているのかということについて、忌憚のないご発言をいただきたい。

○遠山委員 まず2点申し上げる。演劇の都事業は魅力的なブランドを作ろうということで志が高く、賛成する。都と言う以上は、グランシップだけでなく、面あるいは線として、そこが魅力的でないと人は集まらない。例えば、既にある舞台芸術公園も活用して、年に1回世界の最高の人たちを呼ぶ。それに連れて、民間が商業施設やホテルを建てるなどいろいろなことが付随して起これば、SPACが輝くだけではなく、面として裾野から日本平の一带が静岡の文化の拠点になる、といったような構想を考えていただきたい。

次に、今の計画案はどの県にも当てはまるものとなっているので、これが静岡であるということを書いてほしい。静岡県は、優れた山河、駿河湾があって自然が豊かである。また、鎌倉時代から江戸時代にかけて様々な歴史的なことがあったため、歴史・伝統がある。さらに、食材も豊かで、文化財も各地にある、と誇るべきものがたくさんある。しかも、伊豆、駿府、遠江と地域によって特色が違う。そういったものを反映して前面に打ち出した政策としてほしい。自然や食材、文化財などが混合している点を結び付けて線にして、線で囲うと一つの面になる。それを生かしていく必要があると思う。

フェスティバルなども含め、そういう文化の面を地域で掘り起こして、文化の回廊や拠点を作り、非常に豊かな文化の様々な特色のある地域を持つ静岡であるということを確認にして、県民がそれを自覚し、お互いに行き合う。また、県外の人にも、外国の人にも、静岡に来ればそういった非常に深く幅広い文化が味わえるということアピールするような政策を入れてもらいたい。

○横山会長 都としての有り様について、深めていただいた。また、点ではなく、つないで、線から面へということは、いろいろな分野でも思い当たる節がある。

欠席された仲道委員から、意見が届いている。お手元に写しを配っていますので、目を通されたい。今の新型コロナウイルスの蔓延で、社会情勢がかなり根本から変わろうとしているということとかかわる発言であると思う。生きるということと、死ぬということ。もっと日常に皆さんが感じて、その中で文化芸術というものをどう見直していくかということも今日の議論の基本の一つになると思う。

○鈴木委員 文化プログラムは1年延長となって本当に厳しい状況になったが、去年の10

月頃からリスタートした。地域密着プログラムがアーツカウンシルに引き継がれるということで、5年前に願っていたことが具現化できた。グランシップの事業とは全く違う独立性を持つアーツカウンシルをこれから育てていかなければいけない。静岡県の文化の拠点になるように支援するとともに、皆さんからもそう認知してもらいたい。

アーツカウンシルを発展させていくことは、経済と密接なつながりがある。文化プログラムも、様々な企業の支援を受けながらコロナの状況でできないという次第にもなった。企業によっては経済状況に関わらず支援してくれているが、普通、最初に切られるのが文化である。企業に、文化への理解と興味と、応援しようという気持ちがなければ、静岡県の文化も先が見えないという寂しい状況になりかねない。文化が発展するためにはどうしても経済が必要というようなことを感じている。

オーケストラについては、静岡交響楽団と浜松フィルハーモニーが統合されて新しい楽団ができた。同じ静岡県の中でも、風土も気候も、性格も違う地域が一緒になって一つのオーケストラを作る。これは静岡県にとって大変に大きな1歩である。これに観光も含めて、構想をつなげていくことを期待している。

○横山会長　メセナの話も出たので、高山委員の意見を伺いたい。

○高山委員　これまでは、文化を「支える」、その表現力と発信力を高めていくというような意味合いが強かったと思うが、時代の変化の時期を迎え、第5期の文化政策は、「つなぐ」「つながる」ということを基本目標のコンセプトにしてはどうか。

文化芸術活動に携わる多様な人々や推進主体をつなげていく。そういった横のつながりというのが大事な概念になる。特にコロナの下で人間関係の希薄化が懸念されたり、あるいは分断の時代や格差社会と言われる中、芸術文化活動が創り手と受け手、或いは創り手同士、受け手同士など、多様な人と人、心と心をつなぐプラットフォームの役割を果たすと考えている。

○北川委員　静岡県は、フォッサマグナを境に、文化をはじめいろいろなことが東西に分かれたり、あるいは合流する地域である。工業も盛んだが、海と山・森がかなり密接な場所にあるとともに、大きな川が流れている。また、東海道五十三次の宿場町でもあり、そういった力は未だにもものすごくある。今の時代、それぞれ固有の土地の歴史・文化・生活をかなり強力で生かして進めるべきであり、全体が均質化していく中で何かをやっているということは心配である。

個々の強力な地域があって、その歴史・文化・生活ということをやコにしてやっていくようなこと。総合力が高いので、それを出していくということ。機会があったらそういうところに意を払っていった方がよい。

○横山会長 大変重要な指摘である。小規模ながら個性は光っている地域もあるが、県レベルで議論をする時には、広く見渡してならしてしまふことがあり得るので、心得て議論を進めたい。

○木下委員 「文化振興の新たなステージへ」ということだが、どういう状況を指して「文化が振興された」と考えるのかについて、意見を交わさないと駄目なのではないかと思う。

「いつでもどこでも誰もが参加」というところが、決定的に重要だろう。この「誰もが参加」できるというのは、どこへの参加を想定しているのか。日本の文化政策というのは、創作あるいは表現者というものが片方にあり、それを人々が享受するという形で、創作者と享受者というがちりちりできあがった二分法の上に立てられてきたが、現在はもっと交差している。かつての、特定の表現者がいてそれを享受する人がいるという構図が崩れてきて、誰もが表現者になり得る。決定的な環境を用意したのはインターネットだが、今は誰もが自分で発信することができる。なので、従来の創作活動中心、創作者支援という考え方は少し見直して、どういう状況の文化状態が望ましいのかということをもとに考えるべきである。私は、多様な人たちの様々な営みに誰もがアクセスできる環境をいかに作るのかだと思っている。

既にスタートしている「演劇の都」をどう位置付けていくかも、十分に議論すべきである。身体が芸術を生み出す源泉であるというのは、演劇も美術も同じで、何らかの身体表現の結果として、いわゆる芸術作品ができあがってくる。この身体を中心に考えていく。多様な個性の尊重につながる。その結果として「演劇の都」をうたうのはいいが、どういう文化状況を静岡県に作り出していくべきかが問われる。

北川委員から、地域の文化にもっと目を向けよの発言があった。県立美術館について言えば、県立美術博物館の建設構想でスタートしたことから最初のコレクションは小杉文庫という旧正倉院文書であったが、最終的には美術館になった。美術館になることで、地域性よりも普遍的な文化を求めたと考えると、やはり地域に目を向けていくことがおろそかになっていたのだと思う。

近年では文化財保護法の改正もあり、地域の文化資源にもっと目を向けていこうとい

う流れの中で、そうした方向性も理念の中に盛り込むべきだと思っている。そのために活用可能なものとして静岡県博物館協会があるので、このネットワークの強化も考えたい。

○横山会長 お客様を待つのではなくて出掛けていくということか。

○木下委員 美術館外への活動の展開はずいぶん前から始まっている。美術館も様々なワークショップをやってきたが、県立美術館は35年前に設置された施設なので、その当時の考え方の上に成り立っていることは否めない。大きな方向転換と言うか、県単位での文化政策というものが問われている。

○澤田委員 静岡県はすごく大きく、浜松と伊豆では全然文化が違い、静岡も三島も違う。計画案には、その多様な集合体である静岡県が持つ豊かさやその生かし方が出ていない。

文化政策の目的の一つに、県民であることを幸せに感じてもらうことがあり、そこで重要なことが人材育成・教育の問題である。子どもたちは、表現することができるにもかかわらず、表現する方法に気付いていないと思う。演劇のワークショップを通じて、必ずしも演劇者にならなくても良く、一市民としてしっかりした表現ができたり、自分の感情が表現できてコミュニケーションできるようにサポートすることが大事であり、その一つにSPACはすごく貢献できると思う。

静岡県では、小学校から中学校までの間に自己表現を経験する授業を必ず受けさせることで、静岡県に住んでいる人材をすごく豊かにする経験ができて、静岡県民で良かったと思うような経験をさせてほしい。他の県の人から見て、子どもがこういう経験ができる静岡がいいと思ってもらえるようなことを積み重ねてほしい。

文化によって静岡県民はすごくのびのび元気だとか、何かいいアイデアを出してくれらると思ってもらえるよう、5年10年といった長いスパンで考えてもらいたい。

○横山会長 教育委員会の方にも聞いていただきたい発言である。

○宮城委員 若いうちからネットでどう発信するかを磨くような時代になっている。その時に、ネットに何が載らないのかということにもうちちょっと大人の側が気を付けなければいけないと思う。まさに身体・肉体はネットに載らない。

今、多様性が大事だとよく言われるが、ネットで表現している時の多様性というのは、

結局データとしての多様性であり、言っていることが少しずつ違うとか、そういう多様性である。しかし、肉体の多様性というのは、本当に100人100通りである。だから、肉体と向き合った時に初めて、ああ、本当に人はいろいろなのだと思えてきて、そのことが面白いと思えると、人間への信頼というか、人間って捨てたものでもないよねっていう感じがふつふつと湧いてくる。そうでないとうまく発信している人をうらやましいと思ったりするだけで、平準化あるいは均質化、あるいはAIでできてしまうみたいな方向に行って、人間というものへの信頼とか、人間は大事だなんていう感じはなかなか生まれてこないと思う。

これは絵画でも音楽でも同じだが、ネットに載っているものではなくて実物を見た時に肉体がそこにあることを感じるのが、芸術が今のネット社会において非常に浮上している価値である。肉体を見ている、肉体と向き合っていることが楽しいとか、肉体と向き合うとちょっと疲れるけど、それが結局楽しくて盛り上がるということが、静岡県で、あるいは静岡で教育に携わっている人たちで共有できると、静岡で子どもを育てたい、静岡で子どもを産みたい人が増えていくと思う。

人が減っていく地域は、文化どころではない、というように余裕がなくなってくる。かつての日本は、今よりずっと物質的に貧しかったけれども、右肩下がりと思っていなかったから、背伸びしてより高い文化を目指していた。

今が右肩下がりだと捉えると、文化芸術なんて贅沢といった感覚がせり出してきてしまうのだが、そういう意味では、県民所得や物質的な話ではなく、静岡は人が減らないということが大事である。そして、どうすれば人が減らない地域を作れるのかと考えると、やはり教育である。だから、文化があるということは、つまりいい教育があるということで、いい教育があればそこで子どもを産もう、そこに引っ越して子どもを育てようという人が増えてくるのではないかと思う。

○横山会長 議論が本質的なところに近付いてきたように思う。教育という点では、高校生が制服にしばられるより、着るものやヘアスタイルなど、質素でも日々それぞれに工夫して通学するのもいいと思った。

文化プログラムで、ハイテクの人たちと伝統的な手工業をやっている人たちの仕事を、ものづくりという大きくくりで、時期はやむなくずれたが、同じ空間で展示してみたところ、県内各地からいろいろな人が足を運ばれ、静岡県でのものの作り方あるいは表現の仕方に、静岡風があるのかなというのが初めて見えてきた。たとえば、うなぎパイ作りをとっても、その焼き方に名人位の認定もあるようで、これもまた一つの文化と考

えてもいいと思った。

○諸田委員 このコロナ禍で、文化の意味が少しずつ変わってきている気がする。私たちが経済的にイケイケではなくなって、何が文化なのかというのは、生活に根ざした身近なところから生まれてくるものだと感じている。今こそ、文化が大事な時である。

世界で輝くブランド作りもいいが、文化とは、上から押し付けるものではないと思っている。興味を持っている人だけでは、そこでは文化は生まれられないような気がしていて、何も興味がない人や引きこもっている人などいろいろな人に向けてもらうにはどうしたらいいのかということを考えていく必要がある。

これからの時代、若い人たちに文化を必要としてもらわなければならない。そのためにまず小学生や中学生といった年齢の低い時期にいい演劇やいい本、いい映画に触れてもらうように、私たちは力を使うべきである。高校生になると、今度はそれを発信する。子どもたちや若者が、自分の近所のものを発見して、何かの形にした時に、何かするための資金を出してあげるといったように、小さな努力を通じていろいろな人たちに文化に目を向けてもらうということをもっと考える必要がある。

○松井委員 最近のニュースで静岡県がプラモデルの国内シェア9割というのを知った。静岡の魅力や郷土愛につながってくるアイテムだと思う。静岡の特色といえば、富士山にお茶、次にプラモデルというように出てきたら、活性化につながるのではないか。

次に、子どもに文化芸術の教育を受けさせるにあたって、もちろん表現することは大事だが、何もないところからは表現はできない。いかに自分がそれまで芸術を見てきたか、どんな素晴らしい芸術を知っているか。自分で素晴らしい芸術を取り込んで、たくさん見て、そして芸術というものがどういうものなのかというのが分かってきたところで、自分も何か表現をしてみたいというように、表現よりも先にある自分が何を見てきたのかという部分が若干抜けているように思う。小学校の遠足で必ず県立美術館にみんなで行って美術を見る。あるいはSPACの演劇を見る。といったように、教育の現場でカリキュラムとして実際の芸術を見てもらい、そこから表現に変わっていくという、まず芸術が何なのかを知ることをもうちょっと具体的に入れてほしい。

○横山会長 タミヤでは、本物のフェラーリを1台買って分解し、あのプラモデルの原型を作ったという。こういったものの作り方も、この地域のものづくりへのこだわりからできたのだろう。あれは経済でこれは文化でとかではなくて、大いに刺激し合っている。

○太下副会長 静岡らしい文化政策として、1点目、障害者文化芸術振興事業の移管は先進的である。これからの文化の役割の一つとして、福祉的な役割が大きく出てきて、政府でも社会的処方ということが言われ始めており、先取りした展開を静岡で先進的にできないだろうか。

2点目は演劇の都づくりである。これは「演劇の都」構想策定委員会でしっかり進めてもらいたい。

3点目として、専任者がきちんといるアーツカウンシルは全国的に見ても珍しい。専任者の方々に、自分たちはどうしていくべきかをセルフデザインしていただき、アーツカウンシル自身が考えた方向性を文化政策審議会に出してもらって議論するのがいい。

4点目、静岡の文化資源を考えた時に重要になってくるのが、食文化という領域である。文化庁でも食文化を政策領域として取り上げており、静岡も豊かな食文化を包含しているから、食文化も文化として位置付けて、計画に盛り込んでいくべきである。

最後に、北川委員から発言のあった、地域における文化資源と多様性というのは非常に重要であるから、ぜひ計画の前文として記していただきたい。

○横山会長 刺激的な発言であった。昔、イザベラ・バードも、お医者さんに薬をもらわずに、旅に出なさいと言われて、あのような旅行家になった。また、高齢化社会と言われる中で、面白い高齢者が活動する時代が来ようとしているということを心に留めておきたいと思った。

○柴田委員 重点施策は非常に骨太で重たいがよく整理できている。一方、基本目標はインパクトに欠けており、もう少し強調してもいい。遠山委員からも、地域の特徴を反映した静岡ならではの計画を、という話があったが、そういった点で、独創性としてここに掲げられるといい。

感染症が拡大して公演事業が中止・延期をされる中で、分断が起こり、今は分断から再生へ、紡ぎ直すちょうど通過点、経過点であると認識している。文化芸術は本当に人と人をつなぐものなのだから、人の営みの中で行われるものなのだから、人間関係の中で育まれていくものなのだとすることを再認識したように思う。静岡はポテンシャルが多くあると感じているので、ぜひポテンシャルを生かした文化政策を行ってほしい。

感染症が発生した中で、芸術家や団体が自分自身を見つめ直すという変化が起きた。演劇を好きで始めたが、本当に自分は演劇を好きなのだろうかとか、自問自答している

状況もあり、演劇や音楽といった当該分野の存在意義を問い直している状況だと感じる。そのような中で、コロナ禍にあって非常に優秀な作品が次々と生み出されており、これはどういうことかと考えている。

文化活動の支援という観点で申し上げると、今の議論の一つとして、実演芸術と配信。配信については、二項対立論的な議論もあれば融合した議論もあり、皆がいろいろ考えている最中である。配信を活用したことで、思ってもいないような新作が生み出されたり、配信を第3のサービスとして捉えている劇場があったり、観客拡大の機会として捉えていたり、配信行為について、この2~3年で大きな流れが出てくると予想している。

2点目はプロとアマチュアについて、かつては、東京にいる芸術家がプロで、地域はアマチュアという線引きがあったが、今はそうではなく、いかに地域でプロを育てる仕組みを作っていくのが重要である。そういう意味では、SPACで演劇アカデミーという人材を養成する取組が始まるということで、大いに期待している。

原点回帰という考え方から言うと、このコロナ禍にあっては市民の命と文化活動者の場を守ることが重要である。劇場は貸館事業に相当力を入れて、文化活動者の活躍の場を保持していくことが大事である。

○森谷委員 今までの歴史を振り返ると、文化とは、抑えても抑えても泉のように湧き上がるものだと思う。例えば、江戸時代には国民の文化活動を抑制したにも関わらず、文化が力強く湧き上がってきたように、それを連綿とつなげてきたのが日本国の文化になっている。なので、与えるとか誘導するというよりも、自然に湧き上がってきたものをすくい上げてとか、自然に湧き上がるように環境を整えるという形の方が、長く深く根付くと思っている。

そのためには、教育と文化財が私は大きな柱になってくる。特に教育に関しては、文化芸術の授業は激減し、文化祭や学芸会は学習発表会や社会見学に置き換えられてしまった。少しでも収入がある企業に入る、偏差値の高い学校に入るという価値観の中で育てられた子どもたちが何十年と輩出されて今の日本ができていますので、文化レベルは下がって当然であり、当然湧き上がる力も低下している。この現状を変えていくためには、外の機関から地道に与え続けていくことで、現場は必ず変わってくると思う。

一方で、総合の時間を活用した地域連携とか、興味があることを深掘りする時間が伸びてきていて、静岡県教育委員会でも力を入れてくれている。そこから少しでも引き出していくためには、「見る」と「やってみる」。SPACも既に取り組んでいるが、「鑑賞」だけでなく「演じてみる」、つまり「見る」と「やる」をペアにして、地道に与え

続けていくことで教育の流れは変わらなっている。

文化財については、文化財保護活用サポートセンターの内容は、文化財とアートが置き換わっただけで、アーツカウンシルがやっていることと同じだと思った。アーツカウンシルにサポートセンターと連携した文化財保護枠を作るとか、そういうのがあってもいい。

学校が地域と連携していないと、地域のお祭りの価値も分からない。歴史の教科書で言うと日本の全体的な流れしかなく、万葉集と言えば額田王となって、静岡の万葉集は誰も知らないということになり、そうなってくると、地域の小さな文化がどんどんおざりにされてしまう。

○横山会長 大切な意見をいただいた。論点1は一旦ここで区切りとするが、事務局からコメントは。

○渋谷理事 我々が文化振興基本計画に取り入れなければいけない全ての要素に触れていただいた。また、教育に言及をした話題が多かった。今の高校生は、地域に貢献したくてうずうずしているが、学校行事が非常に多忙で地域に出てくる暇もなく、校長もなかなか校門を開いて外に生徒を出せないということが現実としてある。

SPACの中高生鑑賞事業もピーク時は1年間に3万人が参加していたが、今は漸減している。学校の総合的な学習の時間には、外部から多くの要望が集まり、SPACを選択する学校が減るという寂しい現状がある。これについては、学校教育の中だけではなく、放課後の時間を使った部活動的なスクールとして、演劇アカデミーを立ち上げることとした。

○横山会長 では、続いて論点2の重点施策について、まずは文化財の話から、その経緯も含めて伺いたい。

○木下委員 文化財保護の歴史は、文化財概念の拡大の歴史だったと言っていい。文化財という言葉では収まりきれないものをカバーして、文化遺産という言葉が、20世紀の終わりぐらいに登場し、続いて文化資源という言葉が使われるようになった。例えばお祭りについて言えば、戦前には当たり前にあったということもあって、ほとんど保護の対象ではなかった。文化財保護の歴史というのは、危機をどう認識したかという歴史でもある。このため、今は従来の文化財保護法に縛られずに、多様な文化に目を向けていくことが当たり前になっている。文化財保護法は、阪神淡路大震災を機に、国の指定制度

に加えて、地域社会からの登録制度ができたように、社会情勢によって改正を重ねてきている。文化財保護制度を活用しながら、文化財を利用していくといい。

①の静岡ブランドについて、富士山を持ち出すのなら駿河湾もセットで持ち出した方がいい。富士山の高さに対する駿河湾の深さ。駿河湾の深さは見えないが、富士山の高さは見える。見える世界と見えない世界と両方セットで、静岡県の魅力の中に持ち込むというのは必要である。東西の広がりだけではなくて、上下の広がりとも言える。

○横山会長 これまでの流れをわかりやすく語っていただいた。北川委員が最初に言われたように、めでたく美しい景色の底には、何億年単位の地殻の動きもあって、荒々しいとも言える場所もある。一方で、住んでいる人間の謙虚さみたいなものも、文化に関わってくるのではないか。

○北川委員 山があって、海があって、古くからの日本一の幹線がある一方で、地殻的に厳しいところもある。地域ごとに特色があり、日本の縮図のような県だと思う。そこには可能性もあるし、課題もあるし、厳しい問題もあるということをもっと突出した表し方ができると、ものすごくいい指針になると思う。今まで出てきた食も含めて、文化の厚さが日本の中でも決定的に多いところだから、それを総合的にどう発信するかということが重要になってくる。

地域の集落には1人か2人はよそから人に来られては困ると言う人がいる。移動と会食と打ち合わせという人類の蓄積が全部できなくなって、これが全部バーチャルになりつつあるが、それに対して固有な空間が重要だということを立ててほしい。今の伝え方では、地域の集落の高齢者がよそから人が来られては困ると言うのは当然であり、そういう中で、人が移動してくることなどに対して歓迎ができるような、そういった時間やコミュニケーションを取っていく文化政策が重要だと思う。

○横山会長 単体で面白いものはたくさんあっても、どういう文脈で編集していくか。あるいは、あれとこれとつなげていく仲人のような媒介機能が、文化の根幹でもある。一つ優れたものをブランドだと押し出していくのではなく、複数のものをどう組み合わせていくかということは、文化政策としても重要になるのではないか。

○柴田委員 アーツカウンシルしずおかに非常に期待を寄せている。あわせて、プラット

フォームを作るには場が必要であり、そこは劇場及び SPAC が中核となるべきである。重点施策の①から⑤の項目に横串を刺す役割がアーツカウンシルであり、一つひとつの施策や一つひとつの機関、それを結んでいく橋渡し役になってもらいたい。それには、アーツカウンシルだけでなく、行政の方々、市民の方々、中核になる方々の共通言語づくりが必要である。地味な努力だが続けていかないと、大きな花を咲かせることはできない。

また、アーツカウンシルも SPAC も、そこで働く方々の雇用を安定化させる、人を大事にするということが必要で、メリハリを利かせて資金を投入することが必要である。横断的な立ち位置にいるアーツカウンシルで、ぜひ静岡の文化政策のグランドデザインを描いていただきたい。

先ほども述べたが、配信から生み出された新しい価値をどういうふうに着実に定着していくか。まだ定着していない人材や作品をどう評価してどう支援していくのかというのは重要である。行政が新しい価値に評価を付けることは厳しいし、公的な資金を配分することに対して臆病になるのもわかるが、思い切って新しい人材や作品に支援をしていくことにより、静岡の文化芸術を支える活動や人材に成長していくことを願う。

○鈴木委員 論点に教育が盛り込めていないので、どこかに強調して入れていただきたい。そこには、子どもたちが小さい頃から美術や音楽を、鑑賞したり実体験できる環境づくりが大事であるといった文言を入れていただきたい。

○木下委員 先に述べた「楽しむ」について引っかかっていたこととは、楽しめない表現もあるということである。楽しめない表現を楽しむという、そこまで含めた楽しみであるべきである。県立美術館のある展覧会で、頭蓋骨が表現されていたものに対して不快という意見が寄せられたが、美術の歴史の中では、人の死の象徴として頭蓋骨は表現され続けてきた。また、あいちトリエンナーレでも議論となったが、表現の多様性をいかに楽しむかも含めての表現であり、そういう認識や理解は教育を通じて共有していくしかない。

○遠山委員 重点施策⑤の「ウィズコロナ時代における持続可能な文化活動」について、この先どうなるかが誰も分からない状況で、文化や芸術が重視されなくなっているということは大問題だという意識は明確に持つておくことが大事である。そういう時に、持続的に発展させる方法というのはなかなか見えないところがある。計画の冒頭に、今人

類が対面している非常に大きな問題と文化芸術の重要性を前提にした上で、人間がきちんと活躍できるように行政として柔軟に対応していくという精神だけでも書いておくとよい。具体的な案と言うよりは、気持ちもしくは精神を明確にすることで、アーティストたちが何か起きた時には何か助けてもらえるなど、子どもたちにも将来自分たちもそういう面でも活躍できるなど思ってもらえる。

○**太下副会長** コロナの時代の中で文化団体やアーティストが大変な思いをされていて、県でも緊急支援を行っているが、アフターコロナになったら元に戻るかということ戻らない部分がきつとある。例えば、美術館はブロックバスターと呼ばれる展覧会を年に1、2回やって、全体の収支を合わせている感覚があったが、おそらくこれからは何時間待ちという行列の展覧会は、いろいろな意味であり得ないだろう。

国立美術館では従来は入館者数が第一の目標だったが、新しい中期計画では入館者数を目標としなかった。もし入館者数が本来の目標ならば、企画している展覧会を白紙にしてずっとドラえもん展を開催した方が確実に目標が達成できると考えると、入館者数は本来の目標ではないことがすぐに分かる。そこまで考えると、入館者数がそれなりに入ることを前提に考えられていた従来の文化施設の経営というものが、従来通りには行かないだろうと思っている。

文化団体やアーティストを支援していく拠点となる文化施設は、従来通りの経営の仕方では多分経営ができない、そういう節目に来ていると思う。令和7年にはアフターコロナになっているかもしれないが、この項目は県が描いた想定以上に重い項目になると思う。

○**澤田委員** 計画の前文の中に、芸術文化はどんな条件下においても大切に、静岡県として取り組んでいくというメッセージを一文でも入れると、静岡県の姿勢がアピールできると思う。コロナ拡大期にドイツの文化相の「芸術文化は生命維持に必要なもの」という言葉が世界中の芸術文化関係者を勇気づけたように、静岡県がそういうメッセージを出すことは画期的で重みがあるので、そういう一文を入れていただきたい。

○**宮城委員** アフターコロナの時に、世界あるいは日本中から、静岡に人がやってくるキーとして芸術文化が十分機能しなければいけない。多くの所と違って、静岡は歴史や自然、芸術、食事の全てが揃っているので、それらをうまくつなぐことができれば、本当に世界中の人が一度は行ってみたいと思う場所になりうる。

○松井委員 教育においては選択肢も欲しい。芸術文化として、絵画だけではなく、彫刻もあれば映像という選択肢もある。ダンス・演劇もあるし、あらゆる芸術から子どもたちが選択できるように、いろいろなジャンルで本物の芸術を見せてあげられる環境ができたらい。エンタテインメントとは違う、芸術の良さというものがあるということをちゃんと伝えていかなければいけない。

○高山委員 重点施策⑤について、新型コロナウイルスの感染拡大は時代の変革期にあたり、ウィズコロナ、アフターコロナという時代が、生活者のライフスタイルをどのように変えていくのかという見極めが非常に重要であり、生活者のニーズや欲求をポジティブに文化活動の中で捉える、それによって持続可能な文化活動になっていくと思う。

今後の時代がどうなるのかということについて、3点あげる。まず、文化にとってデジタルの力が及ぼす影響は、いい面も悪い面も非常に大きい。声や視覚に加えて触覚までバーチャルに乗せて伝わるようになっていく、進化の度合いをしっかりと見ていくということ。それから、今後は、日常生活の中で非日常の体験を通じて心を豊かにしたいという欲求も強くなるのではないか。

2点目として、インバウンドや観光客が完全に元に戻るのかというと、そこは疑問である。一方で、静岡に移住したい方も増えて、インバウンドや県外からの観光客に依存しない活動を、地域密着型、地産地消みたいな観点で考えていくことが必要である。その中で、デジタルのいい面は大いに文化活動の中で利用していくべきだということと、地域の産業振興ともう少しコラボしていく視点も重要である。

3点目として、施設運営の厳しさに関しては、デジタルのサービスも工夫しながら、運営コストの負担を補うという意味でも、利用者に対する一部課金の仕組みなど、サブスクを含めていろいろな仕組みの活用を視野に入れてはどうか。

○横山会長 具体的な方策まで触れていただいた。私が勤める大学の学生にも、近所にはいろいろあるのだから、4年の間に駅とキャンパスの間だけでなく、近所を歩いて見て回って、ディスカバー浜松、静岡を楽しむように言っている。歩くということを生活にあらためて入れていくのも文化創出につながるのではないか。

(閉会)

○事務局 長時間にわたり貴重なご意見をいただき、お礼申し上げます。ご意見を踏まえて

事務局で計画の骨子案を作成し、次回 7 月頃開催予定の審議会に諮る予定である。以上をもって本日の審議会を終了する。